

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第16号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2022年 6月 11日

【学生会員の活動紹介】

自分を変える出会い

吉田 怜夏
(法文学部言語文化学科2年)

この場に自分の話をのせていただけるということに誠に光栄に思います。同時に、年齢も経験も未熟なため大変稚拙な文章をさらしてしまうことを恥ずかしく思いますが、どうか最後までお付き合いください。

正直私は何となく島根大学に進学しました。何となく授業を受けていれば、卒業できるだろう。大学を卒業しておけば何となく就職もできるだろう。好きなことも、やりたいこともありません。当然本気で打ち込めることなんてものはありませんでした。

ところが私は大学に入ってからすごい人とたくさん出会ってしまいます。かねてからの夢のために都会の大企業に就職するといっただけ入学当初から努力を重ねていく友人。学生時に起業して会社を運営している先輩。三瓶の埋没林をPRするために日本遺産登録を目指し、実際に成し遂げた方。こんなにすごい人たちがいる中で、何となく生きている自分が恥ずかしくなりました。自分を変えたいと思いました。でも、どうやって？私にそのきっかけをくれたのが、小泉八雲だったので。

大学に入るまで八雲の名前すら知らなかった私ですが、ある講義をきっかけに彼のいろんな面を知り、現在でも八雲にちなんだイベントや名物が島根にあると分かり、彼と島根の縁の深さや彼

自身の人柄の面白さに惹かれていきました。そして「小泉八雲で島根を盛り上げることができたら面白いんじゃないか？」と考え、先生に相談してみました。そこから少しずつ、怠惰な私は変わっていくことができたのです。

忘れてしまっていたけど、もともと島根が好きで、地元貢献したくてこの大学に来ました。その思いを取り戻すことができた私は「小泉八雲の文化的価値を見出し、地域活性に繋げていく」という目標掲げて大学1年の12月にプロジェクトを立ち上げ、賛同してくれた仲間と一緒に活動を始めました。その第一歩として出来上がったのが「日めくりへるん」という日めくりカレンダーです。これには八雲にゆかりのある島根のスポットや飲食物、また彼自身の魅力や豆知識を掲載しています。多くの方々の支えのおかげで、八雲と彼に縁のある地島根の魅力をPRできるようなカレンダーをつくることができました。



カレンダー「日めくりへるん」

カレンダー作成時は本当に忙しかったです。製作期限が1か月弱しかなかったということもありますが、いろいろ大変なこと、苦しいことがありました。自分が発起人だからという責任とプレッシャーに押しつぶされそうになるし、だからといって途中で投げ出せないし、そんなことお構いなしにトラブルは容赦なく起こってしまうし…。毎日毎日大変で、つらかったです。しかし、自分の中で一番充実した日々でもありました。本気で打ち込めることに生まれて初めて出会えたからです。

「日めぐりへるん」は200部という小規模な発行で、島根県内を中心に学校や店舗、公共施設などに無料でお配りする予定でした。しかし、その反響は私の予想をはるかに超えていきます。大変ありがたいことに「ほしい」という個人の問い合わせがあつたり、増刷していただけることになったり、記者の方から取材の要望がきたりしました。自分の本気が報われたこと、そして何よりも情けない自分から少しは変わったのではないかと思えたことがうれしかったです。

だからこそ、私を変えてくれた多くの出会いに心から感謝します。支えてくれた友人。頼りない私と共に活動してくれた仲間。私たちのプロジェクトを応援し、快く協力してくださった地域の方々。私のやりたいことを否定せず、真摯に向き合ってくれた先生方。小泉八雲を通して多くの方々と出会い、関わっていき、そしてたくさん助けていただきました。1つ1つの出会いが私にとってかけがえのないもので、大切な宝物です。皆さんのおかげで私は小さくも確かな一歩を踏み出すことができました。本当にありがとうございました。



小泉御夫妻と島大生（於小泉八雲記念館）

（追記）

2022年4月より本会は「学生部」を新設することになりました。現在、学生会員は12名です。

「ハーンを通じて自分たちに何ができるか」をテーマに、自分たちが暮らす地域を盛り上げ、魅力を発信してゆく企画を学生みずから立案し実行する予定です。今後の活動にご注目ください。

カレンダーの製作および設置にご協力いただいた皆様にこの場をかりて感謝申し上げます。

（M）

小泉八雲ゆかりの場所を巡って

菊田 緑里

（法文学部言語文化学科4年）

2019年4月、私は期待や不安を胸に、800km以上離れた地元から島根大学に進学した。コロナ禍でできることを模索しながら目まぐるしい日々を過ごし、あっという間に4回生になってしまった。島根県外に就職が決まったため、松江での生活は残り1年である。松江だからこそできることはないかと考えたとき、真っ先に浮かんだのがハーンについて深く知ることだった。そこで、「へるんさんの松江まちあるきマップ」をもとに、ハーンの聖地巡礼をすることに決めた。

4月19日と20日の2日間、雨の日が多い松江には珍しく快晴だったため、自転車を走らせた。1日目は大学から最も近い児守稲荷神社から始まり、城山稲荷神社、県庁跡地・島根県尋常中学校跡、月照寺、大雄寺と橋北を巡った。2日目は前日が定休日だった普門院から始まり、富田旅館跡、大庭の音石、龍昌寺、洞光寺と駅方面を巡った。ハーンは少年時代に左目を失明し、右目の視力もとても悪い。その代わりに、視力以外の感覚が研ぎ澄まされているとの評価がある。そのためか、五感をフルに使って楽しめる場所が多いように感じた。今回は聴覚と触覚に絞り、聖地巡礼の感想を伝えたい。

まず、聴覚といえば、洞光寺の鐘である。洞光寺では、教え子の横木富三郎が病死した際に追悼法会が行われた。ハーン本人は熊本に引っ越した後のため参列できなかったそうだが、『知られぬ

日本の面影』には以下のような記述がある。

The great bell of Tōkōji is booming for the memorial service, — for the tsuito-kwai of Yokogi, — slowly and regularly as a minute-gun. (485)

実際に鐘を鳴らしてみたところ、重く低い音が全身にずっしりと響いてきた。自分の中にある雑念がリセットされる感覚があり、大切な人を亡くした悲しみに向き合うにはふさわしい。洞光寺は住宅街の坂の上に位置するため、近隣住民にも音が広がり、この感覚を共有できていればいいなあと思う。他にも普門院の観月庵では、季節の虫の鳴き声や、近隣の保育園の子供たちのはしゃぎ声が聞こえてきた。風の音も心地よい。普段の私は周りの些細な音がほとんど気にならないため、ハーンになりきるつもりでいた証拠である。



洞光寺の鐘

次に、触覚といえば、月照寺の大亀の石像である。ハーンは『知られぬ日本の面影』で、その大亀が夜中に暴れ回っていたという怪談を紹介している。

But the most unpleasant customer of all this uncanny fraternity to have encountered after dark was certainly the monster tortoise of Gesshōji temple in Matsue, where the tombs of the Matsudairas are. [...] Fancy — as Izumo folks did — this mortuary incubus staggering abroad at midnight, and its hideous attempts to swim in the neighboring lotus-pond! Well, the legend

runs that its neck *had* to be broken in consequence of this awful misbehavior. But really the thing looks as if it could only have been broken by an earthquake. (255-256)

実際に見てみると、本当に首には大きなひびが2つ入っている。また、現在は頭を撫でると長生きすることが知られている。触れたときの石のごつごつした感覚や、根っこのように地面に張り付く足から貫禄が伝わり、確かに長生きできそうだと思った。境内には松江藩主松平家の初代から九代までの墓がある。ただ長く生きるだけでなく、大亀の怪談のような有り余るほどの元気と、松平家からの魂の後押しがあるようにも思え、大変心強い。さらに、私が巡った聖地には、城山稻荷神社の狐や龍昌寺の地藏など、石像が多くみられた。ハーンはその造りを見比べるだけでなく、触って楽しんでいたのかもしれないと想像できる。



月照寺の大亀の石像

日頃、周りの友人から「遊ぶところがない」という嘆きを耳にする。私も実際、県外出身の新入生に休日の過ごし方を聞かれ、返答に困ったものである。しかし、今回の聖地巡礼で、大学生にはなかなか馴染みのない松江の魅力に気づき、一歩リードしたようで誇らしい。今後とも、ハーンに限らず松江でしかできないことにこだわって、残りの大学生活を悔いなく過ごしたい。最後に、本マップと寄稿を勧めてくださった宮澤先生に感謝申し上げたい。

引用文献

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Tuttle, 1976.

【 研究小論 】

蟻を追ってハーンと出会う

山田 純子

(法文学部言語文化学科 4 年)

アスファルトからむっと湧き上がる熱を感じながら、駐車場の縁石に細長くつづく黒い点線をわくわくしながらじっと眺めていたことがあります。子供の頃の私は、どうやら小さな動くものに興味を引かれるところがあったようで、蟻の行列もその一つでした。行列のゴールがどこにあるのか気になって追っていくと、駐車場の間に植えられた芝生の境目に、ややこんもりとした小さな砂の山と穴を発見しました。満足して引き返そうとすると、視界の端にまた別の行列が目に入り、「一体この行列たちはどこまで続いているのか、途方もないな」と子供心に放心した記憶があります。

ラフカディオ・ハーンも、100 年以上も前に、私と同じように蟻の様子を観察して楽しんでいたそうです。そう思うと不思議であり、なんだかちょっと面白く感じます。私がハーンに出会ったのは、島根大学に入ってからです。はじめは怖い話ばかりかと躊躇していましたが、読み進めていくうち、ハーンの温かくもひんやりする独特の世界観にどんどん引き込まれていきました。その中でも私が特に惹かれたのが、「安芸之介の夢」というお話です。ハーン最後の再話作品となった物語で、『怪談』に収録されています。この作品は、主人公の安芸之介が杉の下で眠っていたときに夢を見るのですが、実はそれは安芸之介の魂が蟻の巣へ入り過ぎた、現実の出来事であったというものです。恥ずかしながら、私はハーン作品の研究という機会を得て、初めてこの物語を知りました。まだまだハーンについては初心者ですが、今の私なりに読んだ「安芸之介の夢」の考察の一部を紹介させていただければと思います。

まず、この作品にはハーンの心が多く映し出されていると考えます。特に、主人公の安芸之介に対して、ハーンの姿がときおり重なって見えるのです。ひとつの所に留まらず放浪する姿、幸せと

絶望を経験し、進んだり立ち止まったりするところに、両者の姿が重なって感じられます。

安芸之介が夢のなかで暮らした蟻の世界は、常世の国という所で、原話では立身出世の要素が強く、再話では争いのない穏やかな世界観となっています。ハーンは再話の際に、常世の国を古き良き日本の姿、ハーンにとっての理想郷にしたのではないかとされています。また、ハーンは蟻そのものに対して特別な思想を持っていて、それは蟻のもつ、高度に進化した利他的な社会性が理想である、というものでした。これらの考えが重なり合い、常世の国は描き直されたと推察します。

ハーンの再話によって描き直されたもののうち、さらに興味深い部分が、地上にいるときの安芸之介と、地下にいるときの安芸之介で、その性質に違いが見られるというところですね。地下にいるときの安芸之介は、自分の意思で行動することではなく受動的ですが、地上にいるときは、自分の意思で行動し能動的に振る舞います。日本の受け身の姿勢と、西洋的な積極的な姿勢だと言いかえることができそうです。また、常世の国に描かれた、古き良き日本という理想郷は幻で、現実には、ハーンが嫌悪していた西洋化が日本を変えていく時代であったことから、それらの要素が混ざり合い、安芸之介の性質変化として現れたのではないかと考えます。

この物語の最後に、蟻の巣は安芸之介の手によって掘り返されてしまいますが、夢から覚めた安芸之介が自らの手で理想郷を壊し、その現実をただ見つめるラストの場面に、ハーンは何を思ったのでしょうか。安芸之介の姿には、夢と現実が混在し混乱する、当時の日本の状況と、ハーンの複雑な心境が映し出されているのではないのでしょうか。

ハーン作品を研究していて、ある時ふと気づくときがあります。それは、以前とは違った目線で物事を見ている、ということです。例えば、目の前をふらふらと飛ぶ小さな虫に対して、なんとなく優しい気持ちになれたり、あるいはその虫を見て、もしハーンだったらこのようなことを考えるのではないかと、というような想像を試みたり。そのような思考は、私にとって面白いものであり、大切なものだと感じます。ハーン作品を通して広がる自分の新しい感覚を大事にしながら、これからもハーンの文学に触れ続けていきたいと思

います。

参考文献

- 小泉八雲『個人完訳 小泉八雲コレクション 骨董・怪談』平川祐弘訳, 河出書房新社, 2014.
- 大東俊一「ラフカディオ・ハーンにおける『虫の文学』」『人間総合科学』第8号, 2004, pp.140-120.
- 那須野絢子「『安芸之介の夢』と『不思議の国のアリス』—ラフカディオ・ハーンにみるルイス・キャロルの影響—」『八雲』第27号, 2015, pp.27-34.
- 牧野陽子「地底の青い空——『安芸之介の夢』」『〈時〉をつなぐ言葉——ラフカディオ・ハーンの再話文学』新曜社, 2011, pp.311-326.



(イラスト・山田)

【特別寄稿】

富山八雲会創立20周年に寄せて

宮澤 文雄
(島根大学法文学部)

これまで20年続けてきたことを問われたら、何があるだろうと試みに考えてみたら、自信をもってこれだと言えるものが何もないことがわかった。現在の仕事に通じる文学研究や教職でさえ20年に及ばないし、幼い頃から続けてきたことも特にない。まさかそんなことはないだろう、と少し不安になりながら、もう一度考えてみても、やはりない。ひとつのことを20年も続けるということは、まさに「言うは易く、行うは難し」なのだ。学生時代からせせせと働き続けている炊飯器と冷蔵庫がなんだか眩しく見えてしまう。

昨年11月、富山八雲会が創立20周年を迎えられたとの吉報が松江に届いた。富山八雲会事務局

長の牧野弥一氏より、「富山八雲会創立20周年記念」と題字された『へるん倶楽部』(第19号)が本会へ寄贈されたからだ。本誌の「特集 資料で見る富山八雲会の20年」によると、表紙は創刊以来ずっと変わっていないようだ。そんなところにも、富山八雲会を20年間支えてこられた会員の皆さんの一途な姿勢が表れているように思う。心からお祝いの気持ちをお贈りしたい。本誌を読んでいるうちに、発足当初はどんな様子だったのだろうか、そんなことがふと気になりだした。第19号を脇挟み、創刊号を求めて、足は大学図書館に向かっていった。

創刊号は、2001年10月12日の設立総会から約1年半後の2003年6月14日に発行された。ハーンの誕生日(6月27日)に近いことから、おそらく、それに合わせた発行だったのだろう。研究者を含め執筆者12名、全78頁。ちなみに、第19号は執筆者15名、全92頁。内容は、2005年12月例会から始まった「輪読会」のレポートが徐々に増えるなどの変化はあるにせよ、現在と比べても遜色のない、堂々たるスタートだったことがわかる。目次には、「ヘルン文庫」関連の文章や調査報告のタイトルが並び、富山らしさが打ち出されている。ただ、そのときのわたしの関心は、創立時の様子がわかるものだった。そこで目に飛び込んできたのが、山田妙子氏の「八雲会入会、その多彩な動機」である。

わずか2頁の短い文章だが、そこには会員がどんな思いで入会したのかが生き生きと報告されている。たとえば、ある方は、数十年前に教科書で八雲を読んだ思い出がずっと心に残っていて、「入会し、再び、八雲に会おう」と思ったという。べつの方は、八雲ゆかりの地であるアイルランドを旅したことをきっかけに「もっと知りたい、富山で八雲を研究し、その活動を支援する人たちと八雲を語りたい」と意気込みを語っている。ほかにも、富山と八雲をつなげることに尽力された高成玲子氏の教え子や同級生という縁から八雲に興味をもった方、富山大学になぜヘルン文庫があるのだろうという素朴な疑問から入会に至った方など、銘々が八雲との縁を語り、その語り口はどれも期待に満ちあふれている。

この「八雲会入会、その多彩な動機」は、入会者の視点から設立当時の様子を記録したものとしてまことに重要なのだが、もうひとつ見落とせ

ないところがある。冒頭文である。それはまるで魔法をかけられたように、時を重ねるほど輝きを増すような文章なのだ。以下に引用する——「なぜ富山に「八雲会」なの、という質問を、わたしたちはこれまでもよく受けたし、これからも問われるだろう。でも、昨秋の「小泉八雲のこころを聴く会」のようなイベントや紀要の発行が続いていけば、次はどんな行事があるの、とか、あの八雲研究の論文、読ませてもらったよ、というように変わっていくことだろう」。

発行当時、産声をあげたばかりのこの言葉はまだ、きっとこうなるだろう、こうなってもらいたい、といった会員たちの願いとして読まれたにちがいない。しかし、それから19年後の現在、実はそれは揺るぎない信念の告白だったのであり、自分たちの未来を予告したものと読み直される。変化した理由は明白である。書かれた言葉が時とともに成長したからだ。富山八雲会の20年の歩みを経て、赤子は思い描いた通りに育ったのだ。

ただ、当初から予感めいたものはすでにあっただと思われる。「わたしたち」という語には、さり気ないけれど、会としての結束が感じられるからだ。この内なる手応えなくしては、きっとあの冒頭の文章は生まれなかったはず——などと、会の立ち上げにかかわった方々の瑞々しい文章に触れているうちに、そんな風に設立当初の光景を思い描いていた。

気づくと、小さな資料室の中は、いつの間にか陽だまりになっていた。シャツの襟元に指をかけながら視線をあげると、窓の向こうでは新緑がサラサラと風になびいていた。

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第142 回例会 総会&読書会

2021年11月13日（土）13:30~15:30

島根大学法文棟1階135教室 参加12名

“Gothic Horror” 218.5-219.17

第143 回例会

2021年12月11日（土）13:30~15:30

島根大学法文棟1階135教室 参加17名

“Gothic Horror” 219.18-222.21

第144回例会

2022年2月12日（土）13:30~15:30

松江国際交流会館3階第二研修室 参加9名

“Nightmare-Touch” 235.1-240.19

第145回例会

2022年3月19日（土）13:30~15:30

松江国際交流会館3階第二研修室&第三研修室

参加13名 “Nightmare-Touch” 240.20-243.15

第146回例会

2022年4月9日（土）13:30~15:30

松江国際交流会館3階第二研修室&第三研修室

参加14名 “Nightmare-Touch” 243.15-246.19

第147回例会

2022年5月14日（土）13:30~15:30

松江国際交流会館2階和室 参加13名

“Some Fairy Literature” 324.1-328.20

2006年に発足した島根大学ラフカディオ・ハーン研究会もあと数年後に20周年を迎えます。また今年4月より学生部が新設され、本研究会も新しいステージを迎えたと感じています。そして学生部の皆様方のカレンダー「日めぐりへるん」を作られたパワーとその素敵なカレンダーにも感嘆しています。これからも学生部の皆様方が本研究会に新しい風を吹き込んでくださることでしょう。

コロナ禍でしばらく講演会をしておりませんが、久し振りに講演会を行いたいと考えております。この度、本会の前会長で島根大学名誉教授であられる常松正雄先生に講師の件を快諾いただきました。今目下、準備中です。関心をお持ちの方は、横山(junkoyokoyama827@yahoo.co.jp)までお問い合わせください。コロナが未だおさまらず、ままならないことのある状況ですが、いろいろと御協力賜りたく、何卒どうぞよろしくお願い致します。

編集後記： 学生部の皆様方には多数ご寄稿をいただき、定期的なことだと大いに喜んでおります。心から御礼申し上げます、ありがとうございました。

(高橋栄)
